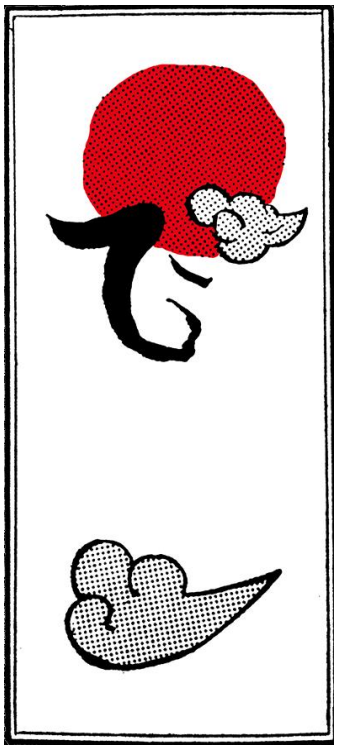

第 30 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲 720-1

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（八）（大和世界の建設）

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

―アルラーハ（Allah）―

イスラーム教はマホメットによって宣揚せられたが、決して新しき宗教を宣べたものでなく、マホメットが固く信じるように、啓示によって永遠の真理が示され、之を衆生に向って復誦せるもので、古蘭はマホメットの説教に非ず、徹底したアルラーハの言葉である。彼は「アルラーハの外に神なし」と宣言したが、彼は決して新しき神を唱えたのではなく、アルラーハのみが崇拝さるべき神で他の諸神は同列に置くべきものでないことを教えたのである。

古蘭の二ノ一三六にはこのように告げてある。

言え！吾等アルラーハを信じ、吾等に下されしものを信じ、アブラハム、イシマエル、イサク、ヤコブ及び諸の支族に下されしものを信じ、モーゼとイエスとに下されしものを信じ、また主より諸の予言者に賜わりしものを信ず。吾等其間に差別を設けず、吾等は唯だ彼に帰命すると

これをもって見るに、アルラーハは前述する旧約の「有って有る者」の呼び名であり、イスラームとは、これに絶対帰依随順することである。マホメットは、最後に選ばれた予言者であり、従って其の伝えた教は、完全無欠に神意を顕揚せるものとするのである。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教は、その本に於て異るものではないのである。

附　中近東に於ける三教の争は人類最も深酷なものである。これを和せしめねば人類の和平はない。日本は万世の為に太平を招くべく志を立てたのである。

この三教を「言向け和せ」ねばならないのである。

ユダヤは他民族他信仰を排斥して「有って有る者」を独専して選民思想となった。日本は天之御中主神（有って有る者）のまにまに生成されて、他宗教他民族と大和し相与に弥栄えんとしているのである。

第三章 農民生活の倫理的考察

～第三節 老農的態度～

菅原 兵治

老農的態度

以上諸種の態度に就いて大体思う所を述べて来たが、斯く考えて見れば、吾々は希くは文質彬々たる彊義的態度を理想として修行すべきことを知り得るであろう。然し私共はこの彊義的態度が、更に一層洗練せられ、醇化せられて来ると、其処に「老農的態度」とも謂うべき円融無碍な―「義」だの「彊」だのという、そんな対立の生活を了凡して、「太極」「天御中主」の「一」の世界に悠々闊歩する真に敬うべく、又、懐かしむべき一種の態度に詣るべきことを知って置かねばならぬ。

木鶏

荘子に次の一章がある。紀渻子（きせい）という闘鶏を飼う名人が周の宣王から頼まれて闘鶏を訓練しました。十日目に王が紀渻子に向って問いました。

「どうじゃ、もうそろそろ蹴合いしても負けぬだろう。」

「いいえ、まだまだいけません。まだ客気にはやってから威張りして得々として居りますので……」

十日経って又聞きますと、

「いやまだいけません、から威張りは余程しずまりましたが、どうもまだ外の鶏の姿を見たり、鳴声を聞いたりするとすぐ興奮致しまして……」

十日経って又聞きますと、

「いや、まだいけません。どうもまだ相手の姿を見ると、眼に角を立てて、汝等何かあらんという威圧的態度がとれませんでね。」

又十日経って聞くと、今度は初めて

「はい、今度はどうやらよいでしょう。他の鶏が来ても少しも態度を変せず、一寸見ると、まるで木鶏のようです。それで少しも隙がないので、他の鶏は手向いかねて逃げて行ってしまいます。」

この「木鶏」が老農の姿であろう。一寸見ると客気にはやる若者、目に角立てて論戦する闘士は如何にもえらそうに見える。けれども私共は、「木鶏」のような円熟し、老成した人格が更に尊いものであることを忘れてはならぬ。然し勿論「木鶏」の域まで進むには、矢張り「闘鶏」の段階を経て来ねばならぬのである。木鶏とは闘うことも出来ぬ弱者の逃避的な獨りよがりの姿では断じてない。私共がよく老農の前に出ると、（近来はかかる老農は甚だ少いが）滔々農村問題や勤労鼓吹の演説を聴かなくとも、其の穆々たる姿容、訥々たる語言に接したのみで、深い反省と毅い発奮と、而してそれよりも、何ともいい得ぬ心のうれしさとに浸るを覚える。敢えて窒素、燐酸、加里の肥料の三要素の講釈を受けずとも、其の醇々として作物に親しむ姿を見ると、講釈以上の啓示に接する。其処に「木鶏」の力があり、「老農」の徳があるのである。近来の学校に於ける講義のノートと、農場の実習と、それを試験の点数取りを目標に勉強して来た近代知識人の眼からは容易に窺われない玄堂かも知れぬが……。

大家族と小家族

三浦　夏南

長野朗先生の『自治論』の中で家族制度についての興味深い文章がある。日本と言えば大家族のイメージが強いがそれは明治以後武家の家族のあり方を一般国民に適用せられたもので、古代より一般庶民は小家族を基本単位としていたということである。今の如き核家族ではないにしても兄弟は成長すれば妻を持って家を分かつのが一般で、一族一体のあり方は武家、貴族に特有のものであったようである。というのも家族と言えど人数が多くなれば、その中で様々な序列が生まれ気づかいが多くなってくる。これはシナでの話であるが皇帝が長く一族の伝統を守って来た大家族の家長にこれだけ長く家の命脈を守り一族団結して生活することが出来た秘訣は何であるかと尋ねたところ、その家長は「忍」の字を書いて皇帝に献上したとのことである。それだけ多くの人を束ね一致団結してことにあたるには忍耐が必要ということであろう。日々の生活を穏やかに楽しく送ることを本分とする農民は時間とともに最も気兼ねのない小家族の形態に落ち着くのが自然であり、古来そうだったのであるから、長野先生は小家族を国家の基礎とすべきであるとのご意見である。

私も国民一般に関しては長野先生のご意見に賛成であるが、それを全国民に適用するのは違うように思う。先生も言っておられるように小家族のあり方は一般庶民には当然であったが、武家貴族は大家族を意識的に形成してきた。それは強い志により大家族を統一し、強大な勢力を以て一般大衆を先導する任を担って来たからである。そして私は武家、貴族の如き大衆に方向を示す強大な先導者こそ今の日本に必要不可欠な存在であると確信している。次世代の武家となり貴族となるものは一家の力を強く長く維持し成長させていかなければならない。その勢力だけなく、精神を長く伝えていかなければならない。それを実現させるのが大家族という家族の形態であり、これは自由で安心な小家族のあり方とは一線を画するものである。志を優先し、勢力の拡大を図るがために家族間での気遣いは増え、小家族のような穏やかな暮らしは難しくなるであろうが、何かを得る為には何かを捨てなければならない。

九割の人間の安定した生活こそ国家の原動力であることに疑いはないが、世界の歴史は九割の大衆の生活史としてだけは展開して来なかったのも事実である。必ずその安定を土台として先頭に立つものの存在が必要であり、先頭に立つものも土台があってこそ前進することが出来る。また前進するからこそ大衆の安定が守られてきたものでその関係は相即不離のものである。農本自治というと庶民の農的生活が第一に想像されるが、我々が目指すのは農的生活者ではなく、農的生活の基盤を切り開いた先導者である。ここのところを肝に銘じて家族のあり方についてこれからも詳細に考えて行きたい。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

朝晩は二十度を下回って少し肌寒くなり、日中も風が涼しく、農作業のしやすい季節がやってきました。トンボを追いかける息子たちの姿を見ると、秋の訪れを感じます。

さて、今月からいよいよ里芋の収穫が始まりました。私達の背丈以上に大きく成長した里芋の葉を、草刈り機で一つ一つ刈り払い、芋掘り機で一気に掘りあげていきます。掘りあげた芋は、親株を中心に子芋、孫芋がくっついて大きな塊になっています。そのままでは土もたくさんついていて重いので、ある程度の塊までパキパキと崩し、コンテナに入れて持って帰ります。最初に取り掛かった畑は、私たちが里芋を作付けしたいくつかの圃場の中でも、生育が良好な所でした。近所の方が、通りすがりに収穫した里芋を覗いては「綺麗にできとるのー。」「大きい芋がついとる、上等じゃ。」などと褒めてくださり、周りのベテラン農家さんにも引けを取らない立派な里芋が無事収穫でき、とても嬉しく思いました。持って帰った里芋の塊をさらに一つ一つの芋に分解し、さらにその根を綺麗に落として出荷作業が完成になります。多い時は一日に二百五十～三百キロの里芋を近くの青果会社に出荷します。足場の悪い畑で、毎日重いコンテナを運んでいるので、少し力がついたように思います。

毎日の里芋の収穫・出荷の合間に、アスパラガスの収穫とネギの定植も同時進行で行っています。三作物を育てていると、あれやこれやとやるべきことが巡ってきて、目が回りそうになりますが、優先順位の高い仕事から一つ一つ行っていくことを心がけています。

九月に入り、雨の日も多くなりました。雨は、農作物にとって非常に大切なものではありますが、農作業が滞る大きな要因の一つでもあります。しかし、最近、里芋の収穫が終わったと同時に雨が降り出したり、ネギの定植後、活着のために必要な雨が、丁度良いタイミングで降りだしたりと、天の神様が味方してくれているかのような雨の降り方が多いと感じます。さらには、里芋収穫の繁忙期で休みのない毎日に、義兄も私も身体に疲れを感じ始めていた時、休息せよと言わんばかりの大雨が降った日もありました。天地自然の神々の声を聞きながら農業をしていると、「今」なすべきことを教えてくれているような気がします。慣行栽培で毎日忙しくしていると、草からし・消毒・収穫・出荷が、毎日のルーティンとなり、「終わらせる」ことが目標の機械的な作業となりがちです。そんな中でも、天地自然の神々の声にただ従い、その一体感を喜びとする姿勢で農業に臨むことができたら、充実した時間が毎日増えるのではないかと考えながら、今日も家族みんなで農業に励みます。

★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

・一般会員	三千円
・賛助会員	一万円
・特別賛助会員	三万円
・支援会員	一万円